

マナスルへの恩返し

のぐち けん
野口 健

- 1 エッセイ 世界へ●世界から
マナスルへの恩返し
野口 健
- 2 みんぱくインタビュー
上橋 菜穂子
現代の語り部
- 8 モノ・グラフ
八重山象形文字・
カライダーの新しい発見
マーク・ローザ
- 10 地球ミュージアム紀行
兵庫県立美術館
港に臨む「芸術の館」
高橋 晴子
- 11 表紙モノ語り
オーストラリア・アボリジニのアクリル画
「ミツアリのドリーミング」
久保 正敏
- 12 みんぱくインフォメーション
- 14 人生は決まり文句で
信じる者は、救われない
関 雄二
- 15 時論 新論 理想論
心地よい生をもとめて
21世紀のライフデザインへ
鈴木 七美
- 16 多文化をささえる人びと
中国人コミュニティと日本社会をつなぐ
「関西華文時報」
中野 克彦
- 18 生きもの博物誌
空気を食べるきれいな食べ物
〈セミ〉
市川 哲
- 20 歳時世相編
七夕
織姫の嘆き
吉本 忍
- 22 フィールドで考える
魚を売ること、生きること
沖縄県糸満のアンマーたちに学ぶ
三田 牧
- 24 みんぱくウィークエンド・サロン
研究者と話そう
次号予告・編集後記

ヒ

マラヤの山岳民族——。それを聞くと、「秘境に住む人々」というようなイメージを抱く人も多いだろう。しかし実際には、インターネットができるほど発展している村もある。

エベレスト山麓のクンブー地方がその顕著な例だ。私は、エベレスト清掃登山などでこの地域に通い続け、その発展をリアルタイムで見ってきた。

この発展の影には、エベレストに初登頂したエドモンド・ヒラリーの力がある。彼は「ヒマラヤ基金」を作り、麓の村々で教育、福祉、環境保全活動を行った。また橋、学校、病院などの設備を整える一方で、自然環境の大切さも啓蒙してきた。そしてヒラリー卿のつくった学校で高い知識を得た生徒は、パイロット、医者、看護師、教師などになり、地域の発展を担ってきた。

三年前の二〇〇六年は、ヒマラヤと日

本の関係において節目の年だった。五〇年前の一九五六年、未踏の八〇〇メートル峰として残されていたマナスル（八一二五メートル）に日本人が登頂したからだ。そのニュースは、新しい国を作り始めた日本人の勢いをさらに加速させてくれたという。

その五〇周年の年に、私はマナスルに挑戦した。しかしその麓で半世紀の「空白」を感じるようになってしまった。

山麓のサマ村では、大雪も強いられる厳しい自然環境のなか、人々は決して快適とは言えない生活を送っていた。村にある学校には、電気がきておらず、子どもたちは、暗い教室で授業を受けていた。勉強をしている子に「将来の夢は？」と聞いても返事がなかった。彼らには、将来何になりたいという選択肢がないのだ。ここにはヒラリーのように献身的な援助をおこなった日本人は誰もいなかったのだ。

賛否両論あれ、私は「即決即行」タイプの人間だ。彼らに手を差し伸べないわけには行かなかった。

まず私は、ここでも「ごみ拾い」から活動をはじめた。サマ村が今後どんな歴史を歩むにせよ「環境意識」は必ず重要になると思ったからだ。村の周辺に散乱するごみを五トンほど回収したが、その時は「ごみ」の意味すらわからない村人も多かった。

三年後の今年、再びサマ村を訪れて驚いた。村が前回よりも綺麗になっていての。その後、村では定期的にごみ集めを行ってこれているという。

今回は、学校の建築について人々と協議を深めた。これから現地の文化を尊重しながら、何年もかけ、さまざまなものを充実させていきたいと思う。五〇年前マナスルが日本人に与えてくれた以上の「夢」を、最適な形でサマ村に恩返ししたい。

アルピニスト。1973年生まれ。1999年、エベレストの登頂に成功し、7大陸最高峰世界最年少登頂記録を25歳で樹立。2000年からはエベレストや富士山での清掃活動を開始。また「野口健・環境学校」を開校するなど環境問題への取り組みを行う。06年、09年にはマナスルを清掃登山。現在、マナスル山麓のサマ村に、学校建築のプロジェクトを進めている。